



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 354号 2011.4.27 発行 社会政策研究所

知的障害者バンド 被災支援ライブ



朝日新聞 2011年4月27日 群馬
練習の成果を発揮する「ネバーエンディングストーリー」＝下仁田町馬山

東日本大震災の被災者を支援したいと、知的障害者のエレキバンド「ネバーエンディングストーリー」が24日、下仁田町馬山の「道の駅しもにた」で支援ライブを行った。集まった募金は26日、福島県の知的障害者を受け入れている高崎市の国立施設「のぞみの園」に寄付された。

ギターやベースを手に真剣な表情を見せたり、時折互いに目を合わせてほほえんだり。道の駅の舞台に立ったのは助っ人2人をふくめて男女8人。1時間ほどかけて、「故郷」や「大きな古時計」など20曲を演奏した。

バンドは、下仁田町や富岡市の作業所で楽器を習っている知的障害者たちが数年前に結成した。富岡市の「ドレミ音楽教室」の西村卓実さんが指導し、生涯学習センターなどで定期的にライブを開いている。

この日のライブは、震災被災者の支援のために募金箱を置こうと企画。西村さんは新聞記事で「のぞみの園」が福島県の知的障害者67人を受け入れていることを知り、募金の寄付先を同園にした。

「同じ障害を持った人で何かできないか、と思った。募金は使い道がはっきり分かっていると使ってもらった方がいい」と西村さんは話す。

3万6246円の募金が集まった。ベースを弾いた神宮由佳さん(24)は「集まったお金を届けたい。もしできたら曲も弾いて、元気を届けられたらいいな」と笑顔で話した。

【社説】震災遺児を支える 一人じゃないよ、君は

東京新聞 2011年4月27日

被災地には、きょうだいや友人に加え親を失った子供たちが多くいる。最愛の人の喪失という現実が、その小さな肩に重くのしかかる。

避難生活を送る小学生の子供たち七人と「だいこん抜き」ゲームを楽しんだ。岩手県陸前高田市のある避難所でのことである。

よくやる遊びでだいこん役数人が輪になって手をつなぎ、うつぶせに寝る。周りで鬼役

の子供たちがだいこん役の足首を持ち引っ張り、つないだ手が離れたら鬼の勝ちだ。だいこんが最後の一本（一人）になるまで攻防が続く。

◆笑顔で話した衝撃体験

被災者は早く日常生活に戻ることを願っている。子供たちにとって重要な日常は「遊び」である。避難所生活では、自由に遊ぶ時間も場所もなかなか確保できない。

国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン」が、遊びの場を提供する「こどもひろば」を各地の避難所で運営している。だいこん抜きゲームもその一コマだ。

ゲームに参加した子供たちは、歓声を上げながら夢中になった。それは「必死に」といっていいくらいである。「もう一回」と何度もせがまれた。

そこに小学四年のゆうくん（9つ）がいた。笑顔を決やさない。ゲームの合間に、一緒にいる父親に買ってもらった携帯電話を見せながら、満面の笑みで言った言葉に衝撃を受けた。

「お母さんと妹二人いないから、お父さんに買ってもらったの。みんな津波で流されちゃった」

周りへの笑顔は、我慢して感情を出さないためだ。あまりに重い現実を受け止められるわけがない。両親がいなくなった子供はさらに深刻だろう。親がいなくなった震災遺児の心の底には、深い悲しみと喪失感がある。

◆長く癒えない心の傷

厚生労働省によると、今回の大震災で両親が死亡・行方不明となった孤児（十八歳未満）は、岩手、宮城、福島三県で百三十人になる。大半は親戚に身を寄せたようだが、児童養護施設に保護された子供もいる。大災害で全容はまだ不明だ。

どちらかの親がいなくなった子供はもっといるだろう。ゆうくんが通う市立高田小学校（全校児童三百一人）では、震災遺児は数十人いるとみられている。

阪神大震災での孤児は六十八人だ。震災遺児を支援するあしなが育英会によると、実は遺児は五百七十三人（うち孤児百十人）を確認している。成人後も親の養育が必要な学生も加えたからだ。今回は被災規模を考慮すると千人は超えると育英会は覚悟している。

震災五年後に実施した育英会調査では、遺児の約七割に心の傷が残っていた。震災十六年後の今回の震災を見て、当時を思い出し苦しむ遺児もいる。

ひとり親家庭も増える。生活困窮も懸念され経済支援も必要だ。

高田小の木下邦男校長は「子供たちはとても重いものを背負ってしまった。どう接したらいいか経験がない。それでも大人が引っ張っていくしかない」と語る。

子供たちを支えることは大人の責務だ。それを実践した先達がいる。大津波で二万人を超える死者を出した一八九六年の明治三陸地震で、孤児となった二十六人を東京で育てた北川波津である。水戸の武家のお出で教養があり、思いやりと責任感の強い女性だ。孤児院をつくりキリスト教も支えに、子供の立場にたった「子供中心主義」の養護に徹した。

主に寄付に頼る生活は困窮を極めたが、波津を紹介した「ニコライ堂の女性たち」（教文館）は、心労で体調を崩した波津のために、子供たちは自分たちの食物を減らして鶏卵を、納豆売りの仕事を増やして牛乳を買ったと伝える。波津と子供たちとの絆を感じる。波津の施設は今、児童養護施設として子供たちを育てている。

当時は子供の社会的養護を担う制度は貧弱で、多くは志ある個人が背負っていた。現代は、社会で支える制度がある。

児童養護施設に加え、全国里親会も動きだした。岩手県は就学などを支援する基金の創設を打ち出した。心のケアに国はスクールカウンセラー派遣を決め、育英会は神戸市に設置した遺児の心のケア施設を仙台市にも設置する。阪神大震災も経験し、社会は支援制度を積み重ねてきた。不十分なら充実させる努力を続けるべきだ。

◆社会の希望を見守りたい

だいこん抜きゲームでは、どの子供もつないだ手を驚くほどギュッと強く握ってきた。それは不安のなかで大人に助けを求めるSOSにも感じる。子供は社会の未来の希望だ。

さまざまな支援制度を通して社会が見守っている。遺児たちに「一人じゃない」とのメッセージを送り続けることが最大の支えになるはずだ。

全国自治体、総力戦で復旧支援 被災地支える



東日本大震災の被災地に対する支援が、全国1771自治体による総力戦の様相を帯びてきた。広域連合は巨大組織の利点を生かし、小規模町村はきめ細かな配慮で、援助を続ける。自治体の底力が、被災地を支えている。

◎関西広域連合 光る存在感／阪神の経験生かす 「長い道のり途切れなく」

毎日午後6時半に開かれる宮城県南三陸町の災害対策本部会議。自衛隊、警察、消防に続いて関西広域連合の派遣職員が報告に立つ。

報告内容も被災者の心のケアや栄養管理、仮設住宅の手続きと多岐にわたる。今やその存在感は絶大だ。

志津川中では18日、関西広域連合が派遣した兵庫県教委スクールカウンセラーの臨床

心理士阿部昇さん（51）が集団カウンセリングを行った。

対象は地元の教師約20人。阿部さんは、自らも体験した阪神大震災を例に、震災後の子どもへの接し方を助言した。

「阪神大震災では被災した子どもたちが、地震ごっこをして遊んでいたことがあった。最初は驚いたが、子どもなりに現実と向き合う工夫と理解してあげてほしい」

教師たちには「長い道のりになるから体の力を抜いて」と語り掛け、全身の緊張をほぐす体操を指導。教師一人一人が語る震災体験に、じっと耳を傾けた。

河北新報 2011年4月27日
災害対策本部で被災者サポートや復興への取り組みを報告する関西広域連合の派遣職員＝25日、宮城県南三陸町
現地本部の看板を掲げる（左から）嶋田芳博鹿児島県鹿屋市長、戸田公明大船渡市長、永野和行鹿児島県肝付町長＝10日、大船渡市役所



阿部さんは阪神大震災の後、神戸市などで被災者の心のケアを10年近く続けてきた。石巻市出身ということもあり「生まれ育った地域に息を吹き返してもらいたい」と精いっぱい支援を誓う。

避難所や町内全世帯を巡回して住民の健康状態をチェックする保健師チームも、関西広域連合が仕切る。

全国各地から派遣された保健師に担当地区を割り振り、お年寄りなら介護が必要か、持病が再発していないかなどをチェックする。乳幼児の麻疹流行を防ぐため、予防接種を受けているかどうかを尋ね歩く。

兵庫県は、宮城県とペアを組んで志津川地区を担当している。保健師大谷真理子さん（50）は「阪神大震災での経験を生かして『途切れない支援』を心掛けている」と説明する。

さらに「医療態勢を少しずつ本来の形に戻すことが必要なので、主体となる地元の宮城県や南三陸町の保健師が動きやすいようにサポートしていくことが重要」と自らに課せられた使命を強調した。（柏葉竜、田村賢心）

◎2万人超す人的派遣／岩手・宮城・福島に集中 義援金・救援物資も続々と

今回の震災では、被災した岩手、宮城、福島、茨城の4県を除く全43都道府県が、人的支援に乗り出している。

被災市町村が要請した職員派遣は7日現在で計673人。避難所の管理運営、救援物資の管理搬送、罹災（りさい）証明などの発行事務のほか、建築士、保健師などの専門職が不足していた。

これに対し、実際の派遣人数と受け入れ人数は地図の通り。派遣職員は震災から1カ月半で優に2万人を超え、その9割超が被害の大きかった岩手、宮城、福島の3県に集中している。栃木と千葉は被災地として支援を受ける一方、3県に職員を送った。

受け入れ人数は宮城が最も多く、既に1万人を突破。その一方で福島は原発事故の影響もあり、災害規模と派遣人数に差が生じている。

財政の厳しい小規模自治体も最大限の支援を続ける。宮城県町村会には、全国の町村から義援金や救援物資が続々届いているという。

全国町村会長（長野県川上村長）の藤原忠彦さん（72）は「大きな被害を受けたのは沿岸部の小規模自治体。支え合い、助け合いが今でも息づく全国の町村の力と心を、東北に結集したい」と話した。

◎鹿児島県4市5町→大船渡／現地本部に9人常駐

岩手県大船渡市には、1300キロ離れた鹿児島県から市町職員が駆け付け、奮闘している。「鹿児島県大隅半島四市五町復興現地支援本部」。同市の猪川地区公民館に掲げられた、ひときわ大きな看板が、地元住民を元気づける。

現地本部には大隅半島の4市5町から1人ずつ計9人の職員が常駐。市災害対策本部が毎日開く記者会見に出席し、不足している物資などの情報を鹿児島県の地元伝える。

現地本部の設置を周辺市町に呼び掛けたのは鹿児島県肝付町だった。町総務課長の前原尚文さん（55）は「長期間駐在することで、日々変化する現地の状況を的確に把握できる」と語る。

もともと大船渡市と肝付町は、宇宙航空研究開発機構の施設が立地している縁で交流する「銀河連邦」の一員だった。震災発生から3日後には、職員5人と給水車が大船渡市に到着した。

前原さんは「周辺市町も全面協力で一致した。東北の皆さんにはなじみが薄いかもしれないが、大隅半島の住民は一丸となって被災地を応援し続ける」と力を込めた。

◎7府県から職員1万1417人・車両49台・簡易トイレ490基...事実上の初仕事／担当県別に援助

「事実上の初仕事が本当に大きな仕事になった。組織の存在意義が試されているのだと肝に銘じて臨みたい」

7府県で2010年末に発足した関西広域連合。広域企画課長の石田勝則さん（47）

は、こう語って気を引き締める。16年前の阪神大震災で培ったノウハウは、被災地で遺憾なく発揮されている。

現地では大阪、和歌山が岩手を、兵庫、徳島、鳥取が宮城を、京都、滋賀が福島をとそれぞれ担当県を決め、マンツーマンの支援を続ける。

災害時に担当自治体を決めて人や物資の供給、各種の助言をする手法は「対口（たいこう）支援」と呼ばれ、2008年の中国・四川大地震で中国政府が実施した。復興の段階で特に効果が大きいとされる。

関西広域連合の事務局は「被災地からの情報を知ってから動くのでは、対応が一步も二歩も出遅れていた。まず、必要と思われる物資を届け、それから各府県が責任を持ってニーズの把握に努めた」という。

関西広域連合から被災地への派遣は17日現在、職員1万1417人、車両49台。支援物資もアルファ米25万9311食、簡易トイレ490基、飲料水用ポリタンク5万1850個など、桁外れだ。

「仮設住宅にはできるだけ集落単位で入居すれば、お年寄りの孤独死防止にもなる」「県外避難者を把握に努め、仮設住宅や義援金に関する情報の伝達漏れをなくす」。阪神大震災の経験を踏まえた貴重な助言の多くが、被災地で実践されつつある。

震災あす四十九日午後2時46分 祈りと希望の鐘 全国寺院一斉に

東京新聞 2011年4月27日

東日本大震災から四十九日目にあたる二十八日、全国の多くの寺院が震災発生時刻の午後二時四十六分、一斉に鐘を鳴らす。犠牲者への鎮魂とともに、復興への志の意味も込め「祈りと希望の鐘」にするという。都内では浅草寺（台東区）、東本願寺（同）、護国寺（文京区）などが実施を決めている。

全日本仏教会（港区芝公園、河野太通会長＝臨済宗妙心寺派管長）が呼び掛け、二十六日現在、二十九の宗派・団体が実施を表明した。鐘をつく回数は各宗派・寺院により異なり、浅草寺は七回、東本願寺は一分間に五回、護国寺は一分おきに十回、など。

各寺とも午後二時前後から法要を予定している。この時間に鐘はつかなくても、数多くの寺が、この日に被災者法要を行うという。

同仏教会は今月七日の理事会で、呼び掛けを決定。四十九日法要でもあるが、いまだ行方不明の人も多数いることから、「復興の志を高らかに世間に鳴り響かせる」という意味を込めたという。

法要などの詳細・問い合わせは、各宗派や寺院へ。（榎本哲也）

河北抄

河北新報 2011年4月26日

キャンディーズがデビューした当時、真ん中で歌うリードボーカルはスーちゃん（田中好子さん）だった。

しかし、鳴かず飛ばず。ランちゃん（伊藤蘭さん）に代わった途端、ヒット曲を連発した。悔しい思いもしただろうが、それをおくびにも出さず、笑顔で歌う姿がいじらしかった。

ミキちゃんこと藤村（現・尾身）美樹さんを入れた三人娘。その中で、最も年下の女の子だったスーちゃんが55歳で亡くなった。

きのうの葬儀では、震災の被災者を気遣う肉声が流された。「必ず天国で、被災された方のお役に立ちたい。それが私の務めと思っています」。元気いっぱいのところとは打って変わって、苦しそうな声で、振り絞るように語る最後のメッセージに心打たれた。

ヒット曲を集めた昔のテープを見つけた。ここ数日『春一番』を繰り返し聞き、若さあ

ふれる歌声にパワーをもらっている。<泣いてばかりいたって／幸せはこないから>
震災のころは<もうすぐ春ですね>だったが、いつの間にか春本番を迎えた。コートを手放して出掛けよう。ゆっくりでも、一歩ずつ。

違憲訴訟 全国2例目「被後見人に選挙権を」 知的障害者の女性提訴

東京新聞 2011年4月27日

成年後見を受けている人（被後見人）に選挙権を認めない公職選挙法の規定は、参政権を保障した憲法に反するとして、児玉郡の知的障害のある女性（55）が二十六日、国を相手取り、選挙権があることの確認と慰謝料五万円を求め、さいたま地裁に提訴した。原告代理人によると、後見による選挙権喪失の違憲性を問う訴訟は、今年二月に東京地裁で茨城県牛久市の女性が提訴したのに続き二例目。（池田宏之）

訴状によると、女性は生まれつき知的障害があり、療育手帳では「重度」の判定を受けている。女性はほとんど投票を棄権せず、選挙権を行使してきたが、さいたま家裁熊谷支部で今年二月、女性の姉の浅見豊子さん（63）を成年後見人として後見開始が確定。公選法では後見人が付いた場合、被後見人の選挙権がなくなると規定しており、女性は今月の統一地方選挙で投票できなかった。

女性は「社会参加が阻害され、幸福感が失われた」と訴え、「憲法は社会的身分などで差別されないことを規定しており、選挙権がなくなるのは違憲」と主張している。

提訴を受け、浅見さんは同日、県庁で会見し、「今まで参加していた選挙に、いきなり参加できなくなるのはおかしい。妹は選挙に行きたがっているのに、権利を奪わないでほしい」と話した。

総務省選挙課は「訴えを把握していないので、コメントできない」としている。

橋下知事「関西に臨時政府機能を」 強い日本へ個人提言

産経新聞 2011年4月27日

大阪府の橋下徹知事は27日、大災害などに備え首都機能や経済中枢機能を関西でバックアップし、首都機能が壊滅状況になった場合、関西の判断で首都から人材を受け入れ、臨時政府や国会、金融・通貨・証券取引機能などを代行する提案を発表した。提案では首都機能の復旧・復興を支援する仕組みを作るなど国土構造の複数系統化に着手すべきだなどと述べている。

橋下知事は現状を「日本外し、いわゆる『ウィズアウト・ジャパン』の危機的状況とし、原因は首都圏への政治・行政・経済の一極集中にあると主張。関西には代替機能を担う力があると、関西国際空港の国際拠点空港化とアクセス改善、中央リニアの早期開通などを改めて求めている。

提言のタイトルは「『大震災』を越えて、“強い日本”を作ろう～大阪・関西が貢献できること」。府の提言ではなく橋下知事個人のメッセージとしている。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行